

---

# 電話の向こう/鋼錬

深海

---

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

電話の向こうへ 鋼錬

### 【NZマーク】

NZ8967A

### 【作者名】

深海

### 【あらすじ】

H××ロイ。B」ですでの御注意を。

「今すぐ執務室へ来い。十五分以内に、だ」

俺はホテルの部屋に備え付けてある電話の受話器を乱暴に叩き付けた。

「兄さんどうしたの？」

いつだってそうだ。いきなり電話してきて有無を言わせずに用件だけ言って切る。

俺はそれを断れない。

「兄さん？」

「大佐んとこ行つてくる」

「また？ しかもこんな時間に？」

俺は心配そうに顔を覗き込んでくるアルを無視して部屋を出た。行くことなんてない。そう思いながらも俺の足は大佐の元へ向かう。

また傷付くだけなんだ。わかっていても自然と早足になる。

俺は大佐が好きだから。

執務室の扉の前に立っている俺はどんな顔をしてるんだろうな。大佐に会えるのが嬉しくてしまりのねえ顔してんのか？ それとも泣きそうな顔か？

俺は大きく息を吸い込むとノックをせずに扉を開けた。机に座り両肘をついている大佐が、スタンドの明かりのみの薄暗い部屋で俺を出迎えた。

「残念だな鋼の。十秒の遅刻だ」

「たった十秒くらい多めに見ろよ。これでも急いで来てやつたんだぜ」

俺がそう言つている間に、大佐は当たり前のよう立ち上がり、上着を脱いでシャツのボタンに手をかけている。

「で、何か用かよ」

「言わないとわからないのかね」

「わかんねーな」

本当はわかつてゐる。こんな時間に呼び出される理由なんて一つしかない。

「私を抱きたまえ鋼の。断ることは許さん」

「フン。今日は、んな気分じゃねえよ」

言つてみたところで結果は目に見えてゐる。俺は言われるままに大佐を抱くんだ。

「そうか。ではハボック辺りに頼むとしよう」

「勝手にしろ」

そう言いながら、俺の足は勝ち誇つた顔をする大佐へと歩み寄る。俺以外の奴が大佐に触れるなんて耐えられないから。

手袋を脱いでだらしなくはだけられたシャツの間に手を差し入れると、大佐は小さく笑う。

「なんだかんだ言つてやる氣ではないか」

「うるせーよ……」

俺は大佐の首筋に噛みつきながら大佐を机の上へと押し倒していく。

つた。

「やあ鋼の。大至急だ。今日は十分以内に来たまえ」

電話の向こうのアンタはどんな顔してんだ?

俺がアンタのこと好きだつてバレてんだろ? 俺のこと利用して嘲笑つてんのか?

それでも俺は大佐の元へ向かう。利用されて傷付くのをわかつても、心のどつかで何かを期待しちまつてゐる。

「待ってるぞ。鋼の……」

fin

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8967a/>

---

電話の向こう/鋼錬

2010年10月9日10時56分発行